
課題口演 | 課題口演 口腔機能低下症

口腔機能低下症

Fri. Jun 22, 2018 10:55 AM - 12:10 PM 第2会場 (1F 小ホール)

1演題15分 (口演7分, 質疑討論8分)

[課題2-3]グミゼリー咀嚼時感応と口腔機能の変化について—吹田研究—

○橋本 栄¹、小野 高裕²、來田 百代¹、高阪 貴之¹、伏田 朱里¹、山本 雅章¹、小久保 喜弘³、野首 孝祠⁴ (1. 大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野、2. 新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野、3. 国立循環器病研究センター予防健診部、4. 大阪大学)

【目的】

8020運動により20歯以上を有する者の割合は、増加する一方で、「オーラルフレイル」は、自覚のないまま進行することもあり、さらに口腔機能低下症へとつながることが報告されている。本研究では、20歯以上保有者におけるグミゼリー咀嚼時感応（噛みづらさの有無）を調査し、口腔機能の変化について検討を行った。

【方法】

国立循環器病研究センター予防健診部による吹田研究参加者で、ベースライン時ならびに、フォローアップ時（4年以上経過）の歯科検診参加者のうち、臼歯部咬合支持域の減少がなく、残存歯数と機能歯数（ブリッジのポンティック、インプラント支持補綴装置を含む）ともに20歯以上有し、追跡期間中に歯数の変化がなかった376名（男性144名、女性232名、ベースライン時年齢50-79歳、平均63.0±7.6歳）を対象とした。咀嚼能率（検査用グミゼリー）と最大咬合力（デンタルプレスケール）を測定し、フォローアップ時の値とベースライン時の値の差をベースライン時の値で除し変化率とした。ベースライン時にグミゼリー咀嚼時感応を問診し、噛みづらさの有無により2群に分類し、上記項目の群間比較を行った。

【結果と考察】

噛みづらさ有の群は全体の9.3%であった。ベースライン時の各検査項目について、2群間に有意差は、認められなかった。一方、フォローアップ時咀嚼能率については、両群とも低下しており、噛みづらさ有の群は、無の群と比較して有意に低く、咀嚼能率変化率も有意に大きかった。最大咬合力については、両群とも低下していたが、2群間に有意差は認められなかった。以上の結果より、グミゼリー咀嚼時の噛みづらさは、咀嚼能率低下の予兆となる可能性が示唆された。